



大学院へ行ってみませんか？

新潟市中央区開業 歯周病専門医 村田 雅 史

(22期生・平成8年3月新潟大学大学院歯学研究科博士課程修了)

【自己紹介】

「はじめまして」と言うには随分と長い間（卒業14年）新潟大学歯学部にお世話になりました村田と申します。歯学部ニュースに登場するのは人事異動の「あしおと」で退職欄に事務的に載ったのが最初で最後だと思っていましたが、今回このような原稿執筆の機会を頂き、正直びっくりいたしました（笑）。

最初に簡単ではありますが自己紹介をさせていただきます。生まれも育ちも新潟市で、年齢的からだの全器官が衰退徴候を見せるなか、体重と内臓脂肪だけは現在も育ち続けております。平成4年に本学歯学部卒業後、新潟大学大学院歯学研究科博士課程(当時の名称)に進学し、原耕二教授(現・新潟大学名誉教授)の歯科保存学第二講座(現・歯周診断・再建学分野)に入局し、研究は朔敬教授の口腔病理学講座(現・口腔病理学分野)にて御指導を受けました。大学院修了後10年間、歯周診断・再建学分野に在籍し、昨年3月に退職後、同年5月より実家の医院にて開業医として現在に至っています(写真1)。

今回は私が大学院でどんなことを経験し、現在の仕事にそのことがどのように関わっているかを、述べたいと思います。

【大学院進学のかっけ】

現在の制度(平成18年4月から)では、歯学部を卒業して晴れて歯科医師国家試験に合格してから最低1年以上、厚生労働大臣の指定する病院もしくは診療所において臨床研修を受ける必要があ

りますが、私が卒業した当時の卒後の進路は：1)研修医(学内外)、2)勤務医、3)大学院進学(学内外)と大きく3つに分かれていました。なぜ、この中から大学院進学を選んだかと言いますと「自分が臨床で一番興味のある歯周治療をもっと専門的に学びたい」→「長く医局に残るには大学院へ進学した方がいいらしい……」ということと、「ちょっとでも“研究する”という世界を体験してみたい」ということからでした。あと、実家が歯科医院であったことも「いずれ実家を継ぐのだし、臨床オンリーの世界と少し違う環境に身を置いてみてもいいかな？」という考えもあったと思います。自分も含めて「素晴らしい研究をして博士号を取る！」というより、私同様「研究してみたい」、「興味を持ったことをもっと勉強してみたい」、「何となく大学院に行ってみようか(笑)」という仲間が多かったように記憶しています。大学院進学理由は、もちろん明確な目標があるに越したことはありませんが、私は何でもいと考



写真1：村田歯科医院スタッフ一同

えています（一部の先生方からはヒンシュクを買うかもしれませんが）。ただ、進学すれば動機はどうであれ「4年間という期限の中で研究を行い、学位論文を書き、それを学術雑誌に投稿する」という過程は全員が経なければなりません。その過程で本当に熱中して研究に打ち込む人もいれば、様々な事情でリタイアする人も出てくるかもしれません。これは何も大学院ということに限ったことではなく、他の進路でもあることだと思います。大学院進学のおかげがこんな風であった私ですから、開業あるいは勤務をこなしながらも明確に「研究をしたい、学位を取得したい」という目標を持って努力しておられる、あるいは既に学位取得をされた社会人大学院の方々には本当にすごいと思います。実際に自分が開業医としての生活に入ってから、今の状態の自分には、毎日の仕事をこなしながら研究を行い、論文を仕上げるということがどんなに大変なことか、到底できない気がします。

【大学院での経験と現在】

当時、私たちの同期は基礎・臨床あわせて20数名が大学院へ進学したと記憶しています。大学院進学にあたって一番心配だったことは「研修医や勤務医を選んだ同期に比べて臨床技術が遅れてしまうのではないか……」という不安でした。これは私だけではなく大学院へ進学した同期の多くが少なからず思っていたことでした。しかしながら、私が大学院生のときは原教授の外来アシスタントに付いたり医局の出張先へ行かせてもらっていましたし、基礎講座所属の同期も関連診療所や病院へ行くことは可能でした。もちろん、研修医や勤務医に進んだ同期に比べれば臨床経験の量的な面ではかなうはずありません。しかし現在では臨床研修が必修でありますから、全く臨床経験なくして大学院へ進学ということはないですし、進学後も外来または出張に出ることは可能だと思います（たぶん！）。あとは本人の「やる気」&「良き臨床の師匠を見つける」これに尽きるのではないのでしょうか。時間は多少かかりましたが、私のような者でも今では歯周病専門医を名乗っていますから……。師匠の奥田先生に感謝、感謝です。「You can do it!!」

大学院へ進学し、研究は口腔病理学講座で行わせていただくことになり、「唾液中における塩基性線維芽細胞増殖因子に関する研究」というテーマを与えていただきました。大学院に入学してしばらくは実験を行わずに自分のテーマに関する文献の収集とそれを行うためのパソコンの使用法から学びました。今、これを読んでいる若い皆さんには信じられないかもしれませんが、「電子メール？ アドレス？ 何それ??」という時代です。文献検索方法を学生時代から学べる今の皆さんを羨ましく思います。そして図書館などで入手した論文を理解はともかく（苦笑）、とにかく読む、読む、読む。学生時代に基礎講座の輪読会や歯周病学実習でちょっとは英語の論文をかじったことがある程度でしたが、毎日英和辞典片手に論文と格闘していました。もちろん、講座の抄読会にも参加しましたが、いざ自分が発表する番になった時の準備前は本当に具合が悪くなりそうなほど緊張しました。こんなに英語の文章を（量的に）読んだことは、後にも先にも大学院時代をおいてはないと思います。また、実験にあたっては試薬ひとつ作るにも当初は「モルって？ N（規定）って何だったっけ!？」と高校時代の化学の教科書を持ち出したりしていました（笑）。

しかし、こんな自分でもやはり研究らしいことで手を動かし、頭で考えるようになってから「Exciting!!」と思う瞬間が何度かありました。また大変に稚拙ではありますが、多少なりとも大学院時代を過ごして「科学的なもの見かた・考えかた」みたいなものが身に付いたように思います。思う存分に論文を読んでもみる、実験してみる、そして実験結果等について語り合う、（もちろん、私のことです）からその合間に大いに遊び、大いに飲んでもいしましたが）こんな経験はまさに大学院時代だったからでは、と思っています。

口腔病理学講座は基礎と臨床の中間といったところで、基礎研究・学生教育はもちろんですが、日常の臨床病理業務（病理診断、病理解剖）も朔教授はじめ講座の先生方・スタッフの御指導の下に行いました。現在も大学院に進学すると、所属の講座にて研究を行う場合、臨床講座から基礎講座（医学部や学外も含めて）へ出向して研究を行

う場合があるかと思いますが、そのいずれの場合でも大学院生の多くは基礎実習のライターとして学生実習に参加することになると思います。私はここで初めて「ひとにものを教えること」がいかにも難しいか、ということを経験しました。多くの教員の方にとっては至極当たり前のことであると思いますが、相手に何かを教えるということは、教える側はその何倍も何十倍も勉強しなければならない、ということを経験時代に身をもって学びました。これは大学院卒業後に歯周病学の基礎実習ライター・総診ライターになってからも、また現在縁あって非常勤講師として歯周治療学の講義をしている明倫短期大学でも、この経験は大いに活かしていると実感しています。また、大学院時代には他大学や他分野の多くの方と知り合いになることができ、現在までお付き合いさせて頂いている方も多くいらっしゃいます。大学院を通して本当に多くの分野のひとたちと知り合えたことも宝物だと思っています。

【後輩のみなさんへ】

とりとめのない文章になってしまいましたが、



写真2：恩師である原 耕二先生(左)、朔 敬先生(右)と一緒に

これを読んだ歯学部の後輩のみなさん、大学院進学に少しでも興味を持ってもらえましたか？ 私は開業医となった今でも大学院へ進んで本当に良かったと思っています。タイトルにあるように、「大学院へ行ってみませんか？」

最後になりましたが、大学院時代の、そしてこれからも私のかけがえのない恩師である朔敬先生、原耕二先生に心より深謝いたします(写真2)。



TV Japan

ミシガン大学口腔外科学教室 泉 健 次

(18期生・平成4年3月新潟大学大学院歯学研究科博士課程修了)

10年ひと昔というが、現在住んでいるこの街に、そのひと昔にも住んでいたことになる。時代の流れや技術の進歩によることもあるだろうし、自分自身歳をとってしまったせいもあるだろう、最初と2回目の滞在を比べると、自分自身をとりまく環境や日常生活の感じ方などを含め、生活の数知れぬ面が、様変わりした。アカデミックな内容ではないが、最も変わったことのひとつに見ているテレビ番組がある。ハリウッド映画同様、アメリカのテレビ番組自体もここ最近では10年前ほどの活気がなくなってしまった。おまけに、母国日本（語？）恋しさに、朝日新聞をとったりもした。翌日配達にはべらぼうに金額が高かったので、月50ドルの新聞配達にしてみたものの、4、5日遅れでかつ、2、3日分まとめて来る新聞はいささか間が抜けていた。それならと、新聞の契約が切れてから、月30ドル余計に払えば見れる“テレビジャパン”に加入してみた。今時期は大学から家に帰ってから、メジャーリーグの試合中継以外は、常時テレビジャパンのチャンネルになっている。アメリカにいる以上、アメリカのことに興味をもたないといけなからと、見る割合は50：50くらいかと予想していたのに、ここまでどっぷりテレビジャパンに浸かるとは思わなかった。やはり“和もの”は心地よいのである。

テレビジャパン社がピックアップした番組編成しか見ることができないのだが、(90%以上はNHKの番組であり、番組によっては半年とか2年前のものが平気で放送される) NHKの報道番組はライブで見ることができる。(こちらで朝起きてからは、7時のニュース、ニュースウォッチが出勤前。帰宅後おはよう日本、そして就寝前にお

昼のニュース) サラリーマンキラ半井さんも気になるが、新潟の天気予報はつい気にしてしまう。最近欠かさず見ているのは、夜に放送がある、朝の連ドラ「どんと晴れ」、である。来週から金曜の夜に、「時効警察」が始まるのも楽しみにしている。アニメ「おじゃる丸」など、日本にいたら絶対見ないであろうという番組も見えてしまうが、のほほんとしていて悪くない。日本だとやたらと忙しく、テレビを見ている時間の余裕もなかったのが、こちらで見る日本の番組はどれも非常に新鮮で、見ている飽きない。見入ってしまうと、ドラマでもつい目頭を熱くしてしまったことも少なくない。過酷なブラジル移民生活を描いた「はるとなつ」は、最後涙が止まらなかった。「ごくせん」にも時々感動させられた。また、世界を舞台に活躍してい



「これも一種のネットワーク？」

日本人の参加者はいないと思って行った学会で偶然お会いし、1日目の夜に設定した宴会に来てくださった、口腔外科講座の4教授。

(at 鳥新、Mount Prospect, IL, USA)

左最前から時計回りに、九州歯科大 高橋教授、その後ろ左は神奈川歯科大 久保田教授、同じく右は大阪大学 古郷教授、そのお二人の後方が広島大学 岡本教授、その右奥の柱の左が小生で、柱の右がラボの同僚 羅文良先生(台湾出身)、その手前がUSC 安教授で、その右側が私のボス、ファインバーグ教授である。

る日本人を見ることができるのは、非常に気持ち
がよい。ベースボールでは、桑田真澄投手や岡島
秀樹投手の健闘に、思わずテレビの前で拍手を
送った。この前は、「プロフェッショナル仕事の流
儀」でソムリエの世界大会のことをやっていて、
残念ながら決勝進出はならなかったが、見ている
興奮し、たまたま主役の方が同年代だったことも
あり、自分を鼓舞する励みになった。

逆に、改めてこれはまずいんじゃないと感じる
日本のニュースも残念ながら少なくない。最近で
は閣僚の自殺に非常に残念な印象をもった。あの
状況で自ら命を絶っても責任をとったことになら
ないのに、大臣たる方が情けないと感じた。死ん
だ人間を悪くは言わない傾向にあるのが日本的な
ような気がするが、残された周囲の人たちにとっ
ては、大迷惑であったはずである。あと、ミート
ホープの偽装事件もひどい話だと思った。社長と
上部の指示によって行われたようだが、従業員も
気の毒だし、第1に消費者を途方に暮れさせた。
何の表示を信じてよいかわからなくなったのでは
ないだろうか。これと似た話としては、中国産の
食物に有害物質の混入が認められたことである。
日本に限ったことではなく、アメリカでも問題で
ある。対象が、常に口にするものだけに気が気で
はない。この報道があって以来、価格が安いので、
日本的な食料調達に行っていた中国人経営の食料
品店には行かなくなったし、冷蔵庫にあった中国
産の食べ物は全部捨てた。世の中に、何事も完璧
な国は存在しないから、どの国をとっても、長所
と短所があるのは当然であるが、先進国にいろん
な意味で肩を並べようとしている国としては、お
粗末である。

お粗末と言えば、アメリカのお粗末だって少な
くない。お粗末な上に、この国はこのままで大丈
夫なのかと、外国人ながら大変心配なこととして
ゴミ処理がある。日本におけるごみの分別は、た
まに帰国した時などは、管理人に相談しないと正
しくできないくらいになって、さすが日本と思っ
てしまう。アメリカでは日本ほど厳しくないが、
一応ゴミ箱のつくりとしては、普通ゴミとプラス
チックと紙の区別くらいはある。また、ドリンク
系のプラスチックボトルにも、リサイクルしま

しょうと書かれている。しかし、最後の詰めがい
けない。ゴミ集めに来たひとが、なんと3つに分
けられていたごみの中身を、収集時にひとつの馬
鹿でかいバケツに放り込んでいるのである。意味
ないじゃん。これをみてから、アメリカで分別す
るのがばからしくなった。その上、こうして1つ
にまとめられた無分別ゴミは、日本のようなゴミ
焼却施設を持たないアメリカでどうなるかとい
うと、ミシガン州から地続きのカナダに持っていか
れて埋められる。おかげでミシガン州の道は、他
州に比べがたがたである。カナダもカナダである。
持ち込まないでくれと怒ればいいのに、構いませ
んよと言わんばかりにアメリカに従順である。こ
のツケはいつか必ず北米大陸に回ってくると確信
している。そんな私は郷に入っては郷に従え、金
属もプラスチックもガラスも普通ゴミに放り込ん
でいる。ただ、日本の分別を知る身としては、使
済みの電池と切れた電球だけは普通ゴミに放り
込む気にならず、分けてとってある。

ごく最近、おはよう日本と、クローズアップ現
代で、苦悩する地方国立大学とポストクの特集を
見た。基本的には、独立行政法人化がもたらした
陰の部分の話であった。新潟大学で学位を頂いた
身としては気が気でない内容であったが、現在私
の知りうる限りの本学歯学部に関しては、この特
集で伝えられていたほどの職員の“苦悩”、研究
室の“厳しい状況”には至っていないのでは、と思
いつつ見てはいたものの、他人事ではすまされな
い厳しい時代に直面しつつあるという認識は新た
にした。体のよい競争原理導入による、大学法人
運営費交付金（本年度増加するのは旧帝大中心の
13法人らしいという噂を聞いた）の削減に大学が
どう対応するか、関係者の努力には頭が下がる思
いである。

研究室を運営する経済的環境が厳しいのは、ミ
シガン大学でも変わらない。ひと昔前と違って
いる面としては、昨今は何を行うにしても、たと
えば何らかのバイオマーカーの研究ひとつをとっ
ても、一つの教室ですべてこなすのはまず不可能
である。優秀な人材や器械は1ヶ所にかたまってい
ない。現在私がやっている培養口腔粘膜に関し
ても、患者移植前の生物学的活性の分析は工学部や

理学部の教室で行われることが多く、培養口腔粘膜のデリバリーに奔走し、あちこちの研究室を訪ねる機会が増えた。「私、作る人」のような感じがないこともないが、行った先々でいろんなフィールドで活躍する人間に出会う。もちろん日本人に出会うこともあるが、基本的に出身は世界中に及ぶ。人のネットワークから、知力のネットワークが構築され、違うフィールドの人が何となく思いついた一見とんでもない発想が、実はすばらしかったりする。人と人のつながりの重要性を感じている。本学歯学部は、私の印象と記憶からは、（他大学の状況は把握していないけれど）学内の他学部とのネットワークや交流は盛んであったと思っている。何らかの画期的な話題で、新潟大学、それも歯学部がニュースで取り上げられることを

願いつつ、今日もテレビジャパンを見ている。

追伸 1

MLB オールスターゲームのイチロー選手のインサイドパークホームランを含めた活躍は、ニュースウォッチのトップでした。さらに光栄なことに MVP に選ばれ、見ていて感無量でした。

追伸 2

7月16日、新潟中越沖地震が発生しました。被災者の方々に心からお見舞い申し上げます。また、地震により亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げます。その上、早期の復興を願って止みません。がんばれ新潟県人。

